

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24600013

研究課題名(和文) 親子の成長を支える体験型子育て支援実践の創造的継承のための実践システムの形成

研究課題名(英文) Developing the system of practice for creatively passing on the experience-based parenting support practice proven to help mother and children grow together

研究代表者

眞 千賀子 (Toma, Chikako)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：60311148

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)： 形成的フィールドワーク(眞2004)を方法論として、親子の成長を支える体験型子育て支援実践に熟達した保育士がその専門性を他の保育士に受け継ぐ営みを保育所の日常活動の中に織り込む際に生じる問題を同定し、創造的継承にはどのような保育所全体の体制上の工夫が必要かを実践形式的に明らかにした。

本研究の体験型支援を担当するには一般の保育とは異なる力量を要するが、担当前年度の準備的参加、熟達保育士の支援の観察、ケースの記録と検討、支援実践現場での専門家による実演や解説などの介入支援を効果的に織り込むことで、担当者の力量を育むことが可能になることを具体的な実践形成を通して明らかにした。

研究成果の概要(英文)： Using the Formative Fieldwork (Toma, 2004) as the methodology, this study identified the problems which arise in the process of implementing the practice for passing on the expertise required in conducting the experience-based parenting support practice (EPSP), and generated the systems for passing it on creatively.

EPSP requires the ability of the practitioner that goes far beyond what is required for the regular nursery school teaching. The present study demonstrated, through the actual formation of the passing-on practice, that it is possible for the selected nursery school teachers to acquire the skills and knowledge required to conduct EPSP, by incorporating the set of practices, such as providing prospective practitioner the warming-up steps prior to the full assignment, learning through observing the experienced practitioner, case documentations and studies, on the spot intervening support including the demonstration and explanation by the expert during the EPSP.

研究分野：発達心理学

キーワード：子育て支援 コミュニティ 発達 文化 保育 学び フィールドワーク 実践

1. 研究開始当初の背景

家庭や地域の教育力の低下と急速な少子化、都市化にともなう養育・教育上の諸問題が噴出する中、「社会全体で子どもを育てていく」ことの重要性が指摘されて久しいが、その実現にはいまだ多くの課題が山積している。

報告者（當眞）は、これまでの研究で、子育て支援センターが設置されている公立保育所での形成的フィールドワーク（當眞2004/2006）を通して個々の親子が抱えている複雑かつ多様な課題を把握するとともに、親としての力量を育み、親子の関係性を育てることを支える体験型子育て支援を実現した〔科研 H21-23 年度 研究課題番号：21610004, 『保育所をコミュニティ資源として親子の抱える課題に応える体験型支援実践の形成』, 研究代表者：當眞千賀子〕。

子どもとのかかわり方のモデルを観察する機会が著しく乏しい状況にある親の場合、ことばを介した面接相談だけでは具体的な子育て実践の改善に繋がりにくい。そこでこの研究では、保育所の支援センターで遊びや昼食などの自然な活動の流れの中で親子の様子を観察し、親子にとっての課題を探りながら、直接子どもにかかわることを通じてかかわり方をその場で工夫し、どう対応したらいいか具体的なモデルを示しながら母親に解説し、さらにそのかかわりを親子に体験してもらおうという支援のケースを重ねた。保育士には報告者（當眞）の親子への支援的かかわり方に直接触れるとともに、記録の書き方、親子の抱える課題の見立て方、支援的かかわり方について学んでもらった。親子の課題の的確な見立てと記録の充実が支援実践を充実させ、多くの母子が互いの成長を引き出しあうかかわりを身につけていった。このような経過の中で、子育てに自信と喜びを感じられるようになった母親が第二子を出産するケースが相次ぐなど大きな成果が得られた。

このように豊かな成果を生んだ実践であるが、これまでにない実践内容であるため、保育所内で自動的に継承されることを期待するには無理があり、この支援実践を習得した保育士が異動を含め何らかの理由で担当を継続できなくなった場合には、途絶えてしまう危険性が極めて高いと判断せざるを得なかった。またこの実践に限らず、これまで多くの優れた実践が定着することなく消え去っており、継承を支える実践知は概して不十分でその生成と蓄積が待たれる状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究で実現した、親子の成長を支える子育て支援実践の創造的継承を可能にする実践システムを構築しつつ、その形成過程を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、「形成的フィールドワーク」（當眞, 2004/2006）の方法により、前述の研究を実施した保育所で、以下のような実践形成型の研究活動を3年計画で展開した。

（1）親子が互いに育み合える関係を築くことを支える体験型支援を担う力量を身につけた保育士がその専門性を他の保育士に受け継ぐために、継承実践のビデオ録画、形成的実践記録、専門家（當眞）によるモデル提示やアドバイスを効果的に組み合わせ、保育士の持ち味を活かし多様な親子のニーズに応える支援実践の創造的継承のための実践システムを構築しつつ、その形成過程を明らかにする。

（2）親子の育ちを支える体験型の支援実践を継承していくためには、保育所の運営体制としてどのような工夫が必要か、継承実践の形成の試みを通して明らかにする。

（3）異年齢保育を軸とした保育所全体の実践の特徴と実践体制は、子育て支援実践の継承過程にどのような影響を与えるかを検討する。

本研究を方法論的に支える「形成的フィールドワーク」（當眞, 2004/2006）は、従来の記述を目的としたフィールドワークと異なり、実践現場の人々との問題・課題の共有とそれを踏まえた実践の形成までを射程に入れたフィールドワークの方法である。具体的な現場（フィールド）の実践場面で、従来の「参与観察」に留まらず、研究者自らが必要に応じて実践に介入しつつ現場の人々と協働して工夫を試みる—そして、その過程で何が生まれるかを関与しながら観察し、観察しながら関与を続けるといった一連の流れが組み込まれる。

4. 研究成果

本研究では親子の成長を支えるために、親子への介入を含む体験型の子育て支援実践の継承を試みたが、この実践には一般の保育とは異なる力量を要するため、多くの保育士にとってそのような支援を担うことは心理的にも技術的にもかなりハードルが高いことが明らかになった。これまでの保育士の養成課程は子どもの保育を中心に構成されており、子育て支援現場で親子の成長を支えるような支援を行うのに必要な知識と体験が得られるようにはなっていないことを考えるとこれは無理のないことである。

そこで本研究では、このような支援実践に熟達した保育士がその専門性を他の保育士に受け継ぐ営みを保育所の日常活動の中に織り込む際に生じるさまざまな問題を同定し、創造的継承にはどのような工夫が必要か

を具体的な実践形成を通して明らかにした。継承実践の詳細は多岐にわたるが、その中から7つのポイントに絞って以下に報告する。

(1) 保育士の配置上の工夫

保育所の日常活動の中で親子の成長を支える体験型の子育て支援実践を継承するには、次のような運営体制を工夫する必要があることが明らかになった。

- ① 支援センターに体験型支援実践についての熟達度の異なる二人の保育士を配置し、複数年度担当体制にすることで、センター内で経験年数が長く熟達度の高い保育士から、新たに担当する保育士への実践の継承を可能にする。
- ② 支援実践に熟達した保育士を一般の保育に戻す場合、支援センターの隣の保育室の担当とし、その保育室も複数担当にすることで、必要に応じてセンターに入り、新担当保育士の学びをサポートできるようにする。

(2) 保育所全体の運営体制上の工夫

子育て支援センターの活動内容やその意義を保育所の職員全体で共有し、センター担当保育士と他の保育士が相互協力できる体制を組むことで、子育て支援センターの活動と保育の融合を質的にも量的にも高めたことが継承のための実践づくりには欠かせない体制的特徴のひとつとなった。

(3) 熟達保育士による支援実践の観察を通じた学びの工夫

親子が互いに育み合える関係を築くことを支える体験型の支援を実践する力量を身につけた保育士の支援実践を、新担当保育士が観察する機会が十分にあることが、継承のための学びの主要なプロセスになることが明らかになった。このような観察の機会が日々の活動の中で自然かつ豊富に生まれるようにするためには、同じ場面に居合わせるような役割の取り方や割り振りを工夫する必要がある。

(4) ケースの記録と検討による工夫

積極的な介入的支援を必要とする親子については、親子の課題の見立てや介入過程を含めたケース記録を蓄積し検討を重ねることが、親子の成長を支える支援の質を維持・向上させるために欠かせないだけでなく、新担当保育士の支援実践の学びにとって極めて重要な活動となった。

(5) 担当前年度中の準備を通じた工夫

子育て支援センターで親子への介入を含む支援を初めて担当することは、保育士にとっては心理的にかなりハードルの高い課題であるという問題への対応として、担当前年度に3つのステップに分けて支援センターでの

ワーキングアップ的担当体験を実施したところ、有効に機能することがわかった。

(6) 専門家による実演や解説などの介入を通じたサポートによる工夫

子育て支援センターを利用する多様な親子の特徴を、かかわりを通して把握し、適切に課題を見立ててタイミングよく介入するというのは総じて難易度の高い実践である。支援センター担当保育士としての体験を活かして有効な支援的介入が可能になるタイプのケースがある一方で、熟達保育士にとっても対応の難しいケースもあった。後者については、専門家(眞)が親子と直接にかかりながら支援の仕方を探り、介入的支援を試みるプロセスを見てもらうことを通じて、熟達保育士と新担当保育士の両者が共に学ぶ機会を設けることで今後の支援の可能性を高める必要があった。

さらに、課題の性質によっては、保育士による支援が可能な範囲を超える場合がある。無理な介入を避け、専門機関に繋ぐ工夫を試みる必要があるケースについての理解と見立てを支える学びについては専門家によるサポートが必要であった。

支援の過程での親への解説が担当保育士にとっては工夫と継承が難しい領域であることが明らかになったため、支援センターでの眞による支援ケースのビデオ記録をもとに、解説を含む支援の具体例を盛り込んだ事例集を作成し活用することが有効に機能した。

(7) 異年齢保育を軸とした保育所全体の実践的特徴の貢献

本研究を実施した保育所では、平成18年度より2年間の形成的フィールドワークにより、異年齢保育の導入を軸として保育所を子育てと親育てを支えるコミュニティとして育むプロジェクトが実施された[科研H18-19年度研究課題番号:18530503, 研究課題名:『就学前教育現場を軸とした子育て・親育て・コミュニティ育て支援実践システムの構築』研究代表者:眞千賀子]。

この研究によってスタートしたプロジェクトはその後発展的に継続し、本研究を実施した平成24-26年度中も、保育所全体の実践的基盤となっていた。このプロジェクトを通して育まれた保育実践には、保育士の間でのコミュニケーションを密にし、相互協力体制を充実させる特徴があり、それが本研究における支援センターの実践の創造的継承に必要な運営体制の実現に大きく貢献した。

また、保育所全体で保育を考える異年齢保育を体験した保育所の子どもたちは、支援センターを利用する親子にも自然な関心を寄せ、おおらかにかかわってくれたことが、支援センターの実践内容を充実する上で大事なリソースとなった。

以上、本研究を通して、一般の保育とは異なる力量を要する体験型の子育て支援実践の継承は保育士にとってハードルの高い課題であるが、継承を支える工夫を効果的に織り込むことで実現可能であることを、具体的な実践形成を通して明らかにすることができた。

さまざまな領域でこれまで多くの優れた実践が生まれながらも定着せずに消え去っており、継承を支える実践知の生成が求められている。本研究の成果は、継承を可能にする実践の具体的な形成を通してそのような実践知の蓄積に貢献するものとなった。

本研究で継承を試みた体験型子育て支援実践は豊かな成果を生んでいることから、より多くの子育て支援現場での実現を求める声が上がっている。他の現場での導入・継承を可能にするには、さらなる工夫が必要となるが、そのような工夫を支える実践知を提供するには本研究の成果だけでは不十分であり、今後の課題として実践形成型の研究による取り組みが待たれるところである。

〈引用文献〉

當眞 千賀子 (2004). 問いに導かれて方法が生まれるとき — 形成的フィールドワークという方法 *臨床心理学 vol. 4, no. 6*, 771-782.

當眞 千賀子 (2006). 形成的フィールドワークという方法 — 問いに応える方法の工夫 吉田寿夫 (編) *心理学研究法の新しいかたち* (pp. 170-194) 誠信書房

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 8 件)

① Chikako Toma (2014 Oct.) Creating practice for passing on a successful practice from one generation to the next by formative fieldwork. The 4th Congress of the International Society for Cultural and Activity Research, Olympic Park, Sydney, (Australia).

② Chikako Toma (2014 Oct.) Formative fieldwork: Supporting development through generating everyday-practice by active intervention. The 4th Congress of the International Society for Cultural and Activity Research, Olympic Park, Sydney, (Australia).

③ 當眞千賀子 (2013年8月)「子育て支援の現場から」日本ブリーフサイコセラピー学会第23回大会 大会企画シンポジウム『臨床現場における配慮と工夫～それらが生ま

れるところ』駒澤大学(東京都・世田谷区)

④ 當眞千賀子 (2013年8月)「子育て支援・母子の相互作用に介入するアプローチを読み解く」日本ブリーフサイコセラピー学会第23回大会 駒澤大学(東京都・世田谷区)

⑤ 當眞千賀子 (2013年3月)「親子の成長を支える体験型子育て支援実践の創造的継承の試み I」日本発達心理学会第24回大会 明治学院大学(東京都・港区)

⑥ 當眞千賀子 (2013年9月)「母子分離の困難な母子への子育て支援センター現場における介入的支援」日本心理臨床学会 シンポジウム『現実に関わりつつ心に関わる臨床を考える — 真の現場のニーズ把握・介入とは何か? —』話題提供 愛知学院大学日進キャンパス(愛知県・日進市)

⑦ 當眞千賀子 (2013年3月)「保育士の学びと親子の成長を支える体験型子育て支援実践の形成 I ~親子の抱える課題の見立てと支援実践を育む形成的フィールドワーク~」日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場(名古屋市・熱田区)

⑧ 當眞千賀子 (2013年3月)「異年齢保育を軸とした保育所での村づくりと大震災」日本発達心理学会第23回大会 公募シンポジウム『災害との出会い方と日常の営み方 — 日常が支える非日常・非日常が支える日常 —』企画及びパネリスト 名古屋国際会議場(名古屋市・熱田区)

[図書] (計 1 件)

① 當眞千賀子 (2013年)「子育ての社会・文化」無藤隆・子安増生編『発達心理学 II』4章 [社会] (pp. 279-285). 東京大学出版会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

九州大学・人間環境学研究院・教授

當眞 千賀子 (Toma, Chikako)

研究者番号: 60311148